

決め台詞は七五調

神戸女学院大学非常勤講師 東野泰子 ひがしのやすこ

「一かけ二かけ 三かけて」

かなり幼いころ、どこでだれと歌ったのか、記憶もさだかではないが、こんな手遊び歌を歌っていた。

一かけ二かけ 三かけて
四かけ五かけ 橋をかけ
橋のらんかん 腰おろし
はるか向こうを 眺むれば
(…中略…)

わたしは九州 鹿児島
西郷隆盛 娘です

この『一かけ二かけ三かけて』は近年、耳にすることもなくなった。「西郷隆盛の娘」はさすがに今となつては古すぎるのだろう。同じく手遊び歌の「みかんの花咲く丘」(作詞…加藤省吾)はいまどきの小学生も歌っていることがある。

みかんの花が 咲いている
思い出の道 丘の道
はるかに見える 青い海
お船がとく 霞んでる

二つの手遊び歌は、メロディ・リズムがそれぞれ違えど、どちらも七五調の歌詞である。これらのほか、幼稚園や小学校で歌っていた『ウミ』(「海はひろい大きないな…」)や『鯉のぼり』(「鯉の波と雲の波…」)、中学校で合唱した『荒城の月』(「春高樓の花の宴 めぐる盃 かげさして…」)や『花』(「春のうららの隅田川 のぼりくだりの 船人が…」)など、七五調の歌は少なくなかった。「マッチ一本 火事のもと」とめてくれるな おつかさん」といった、テレビなどで耳にする標語やキャッチフレーズの場合も、七五調は耳に残りやすく、最も基本的な日本語のリズムとして、私の身

には刻み込まれている。

しかし、『荒城の月』や『花』は、詞が文語であり、メロディも今風ではないせいか、現在ではあまり歌われないようで、知らない生徒も多くなった。はやりの歌やキャッチコピーにも七五調はあまり見られない。

そのせいか、授業で和歌を扱うと、なんだか身構える生徒がふえた。短い詩型に圧縮された意味をとらえる難しさもあることながら、それ以前の問題として、『五・七・五・七・七』のリズムが体感しにくいらしい。音読してもらうと、例えば、「人は、いさ心も、知らず……、『いさ心』って何ですか?」というようなことになってしまう。教える側が思う以上に、いまの子どもの持っている日本語のリズムは、昔と違ってきているのかもしれない。

「何だかんだと聞かれたら」

とはいえ、現代の子どもたちがよく知っているもののなかにも、七五のリズムがないわけではない。

何だかんだと 聞かれたら
答えてあげるが 世の情け
世界の破壊を 防ぐため
世界の平和を 守るため
愛と真実の 悪を貫く
ラブリーチャーミーな 敵役
ムサシ! コジロウ! :

テレビアニメ「ポケットモンスター」に登場する敵役、ロケット団のムサシとコジロウは、登場するときに必ず右の決め台詞を言うので、知っている子どもも多いはずである。この台詞はまさしく七五調で、しかも一、二句、三、四句が対句仕立てで、『祇園精舎』と同じ構造である。

祇園精舎の 鐘の声
諸行無常の 響きあり

沙羅双樹の 花の色

盛者必衰の 理をあらはす :

平家物語は「平曲」として、耳から人々に親しまれたもので、『祇園精舎』はその冒頭である。耳で聞いてわかりやすく、人を惹きつけるリズムとして、平家物語の時代、七五調は既に定着していたのであろう。

このように、七五の句を繰り返す歌謡には、平安末期から鎌倉期に流行した「今様」がある。現在放送中の大河ドラマ『平清盛』のオープニングで、現代的なメロディにのせて歌われている「遊びをせん」とや 生まれけむ…は、「今様」の中でも、最も知られた曲であらう。

「知らざあ言って聞かせやしよう」

ポケモンのロケット団は、主人公サトシからピカチュウを奪い取ろうとする泥棒一味である。泥棒の決め台詞というところから考えれば、ロケット団の台詞に直

接的な影響を与えているのは、河竹黙阿弥『白波五人男』の台詞であらう。

知らざあ言って 聞かせやしよう
浜の真砂と 五右衛門が
歌に残せし 盗人の
種は尽きねえ 七里ヶ浜
(…中略…)
名さえ由縁の 弁天小僧
菊之助とは 俺がこった

女装の盗賊、弁天小僧菊之助が男であることを見破られて、自ら名乗る場面での有名な台詞である。ロケット団も弁天小僧も泥棒であり、「何だかんだと聞かれたら 答えてあげるが世の情け」と、「知らざあ言って 聞かせやしよう」の意味するところも同じである。また、ムサシが宮本武蔵、コジロウが佐々木小次郎に由来していることは明らかである。毎度、ピカチュウの十万ボルトで吹き飛ばされるロケット団ではあるが、実は日本文化の伝統にのっとったなかなか粋な泥棒である。

東野泰子

大阪府生まれ。論文に『奥義抄』から『僻案抄』へ「そが菊」注にみる院政期歌学の一様相」(『国語国文』)など。共著書に『八雲御抄の研究』正義部作法部(片桐洋一編和泉書院)、『宴曲索引』(伊藤正義監修和泉書院)などがある。